

[プロジェクト研究]
ブラジルにおける日系移民資料の分析・保存と
デジタルアーカイブ構築
—移民百年の軌跡—

はじめに

ラテンアメリカ研究所では、2007～2008年度にかけて立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）の助成を受け、単独プロジェクト研究「ブラジルにおける日系移民資料の分析・保存とデジタルアーカイブ構築：移民百年の軌跡」を、慶應大学デジタルメディアコンテンツ統合機構と連携して実施した。

このプロジェクトの目的は、移民の高齢化や日系人の日本語・日本文化に対する関心の希薄化が進む中で、急速に消失・劣化の危機に瀕している貴重な移民関係資料や移民たちの言説を、将来に向けて的確に収集・保存し、それらを広く社会に公開することで、ブラジル移民研究を深化させ、移民に対する社会的関心を喚起することにあった。

このような目的を達成するために、われわれはブラジル各地の日系人集住地を訪問して、日本移民やその子孫から個別にライフストーリーやファミリーヒストリーを収集・分析すると同時に、現地に残る古い文書、写真、地図などの史料を収集・整理して、それらのデジタル化とメタデータ登録を進めた。その際、現地のプロジェクト関係スタッフに対して、デジタル化や史料保存の方法に関する講習も実施した。また、帰国後に収集したデジタルメディアコンテンツを利用して、デジタルアーカイブの制作を行った。以下に当プロジェクト研究の概要を説明する。

1. 研究目的と研究方法

ブラジルで150万人を越えた日本移民とその子孫（以下、日系人とする）の歴史は、2008年に百周年を迎えた。本研究はこの機会をとらえ、ラテンアメリカ研究所主導のもとに、ブラジルにおける日系人の足跡を文書や写真、言説などの多様な資料から解き明かすと同時に、その資料群をデジタルアーカイブとして保存・活用するシステムの構築を目指した。

調査・研究はブラジル国内の代表的な日系人コミュニティを事例として、大きく次の2つに分けて実施した。

- 1) 日系人コミュニティや事例家族の歴史や文化変容をテーマとする基礎的研究
- 2) 収集された移民関係資料のデジタル化と、デジタルアーカイブ構築に関する研究

このプロジェクト研究がカバーする学問分野は、日本からブラジルへの人の移動、あるいは移住地という固有の場所における多様な生活・文化を記録する点で、歴史学、地理学、文化人類学などと深い関連がある。また、資料のデジタル化やアーカイブの構築に関しては、博物館学や情報処理学とも関わりも深い。

2. 研究組織

役割	氏名	所属大学・職名等
研究代表者	丸山 浩明	立教大学・文学部・教授
研究分担者	豊田由貴夫	立教大学・観光学部・教授
	山浦 清	立教大学・学校-社会教育講座・教授
	岩田 晋典	立教大学・ラテ研・研究員
	中村 茂生	立教大学・ラテ研・研究員
	根川 幸男	ブラジリア大学・外国語翻訳学部・助教授
	小嶋 茂	JICA横浜移民史料館・研究員
研究協力者	遠山 緑生	慶応大学・DMC統合開発機構・講師
	山口 真里	慶応大学・DMC統合開発機構・写真師
	西山 洋介	慶応大学・メディアセンター・職員
	渡辺 伸勝	関西学院大学博士課程大学院・院生

3. 研究対象とする地域と機関

研究対象とする地域と機関は、サンパウロ州バストス移住地と「山本三郎記念バストス地域史料館」、アリアンサ移住地と弓場農場の「北原・輪湖記念館」、マツグロツソ・ド・スル州カンボグランデ市と「カンボグランデ日伯文化体育協会」、サンパウロ州サンパウロ市と「サンパウロ移民史料館」、そして日本の高知県壽原町にある「竹下写真館」である。

このうち、とくに今回集中的に調査・作業を行ったバストス移住地とカンボグランデ市は、いずれもブラジルを代表する特色ある日系人コミュニティが存在することで有名で、すでに相当数の移民関係資料等が確認されている。本プロジェクト研究では、すでに現地協力体制が整っているこれらの地域と機関を中心に、現地研究者の協力のもと、聞き取り調査や資料の収集・保存、デジタルアーカイブ構築に取り組んだ。なお、バストス移住地とカンボグランデ市の概要は次のようである。

〔サンパウロ州バストス移住地〕

第一次世界大戦後の不況下、日本政府が本格的にブラジルへの移民送出と組織的な定住植民地の創設に乗り出す中で、バストスは1928年から開拓が進められた代表的な日系移住地である。

今日、バストスの総人口約2万人のうち、日系人はその約20%を占めるといわれる。壮年層を中心に「出稼ぎ」も活発で、今日の代表的なブラジル日系人コミュニティの一つといえる。開拓当初の入植者は今も数人が健在である。1973年に開館した「山中三郎記念バストス地域史料館」には、バストス開拓時代からの貴重な文書類、写真、物品等が所蔵されている。しかし、残念ながら資料類は整理が行き届いておらず、本プロジェクト研究が果たす役割は大きいものと考えられる。

〔マットグロッソ・ド・スル州カンポグランデ市〕

カンポグランデ市は、ブラジルでもとくに日本移民の歴史が古い移住地の一つで、1914年に最初の定住家族が記録されている。1908年に「笠戸丸」で海を渡った最初のブラジル日本移民の多くは、その後コーヒー農場から逃亡して国内外に離散したが、当時ブラジル奥地で建設が進められていたノロエステ鉄道の工夫としてこの地に集まった初期の日本移民たちが、カンポグランデ市で最初の日系入植者となった。現在、カンポグランデ市とその近郊には20を超える日系人移住地が存在するが、とりわけ沖縄県出身者が多いことが大きな特徴で、ウチナンチュウの伝統文化がブラジルで最も色濃く残る古い日系移住地として知られている。

4. 調査・研究成果の概要

(1) サンパウロ州バストス移住地における日系人コミュニティの実態調査

本プロジェクトでは、これまでにブラジルで実施された日系人実態調査を参考に、2007年9月に3週間かけてアンケート調査を実施し、最終的に104名の日系人から有効な回答を得ることができた。その結果、バストス市の日系人について、1) 基本的属性、2) 日本との関係、3) 地域日系コミュニティへの関わり、4) 民俗・風習と意識、5) 言語使用状況、6) 教育、の6項目に関する特性が明らかになった。

また、バストスにおける日系人コミュニティの歴史を、事例家族の詳細なファミリーヒストリーを軸に描き出す試みの一つとして、「水本家」を取り上げて調査・分析を行った。「水本家」は岡山県出身の移民家族であり、バストスでの生活を経た後サンパウロ市に再移住し、商業分野で大きな活躍を遂げた一族である。換言すれば、農村生活から都市生活へと移行することで人生を開拓した移民家族の一例であり、それは日系移民史における一つの大きな必然的流れでもあった。本研究では詳細な聞き取り調査にもとづき、写真なども積極的に活用して、農村から都市へと再移住していく社会・経済的背景やその具体的戦略などを解明した。

(2) マットグロッソ・ド・スル州カンポグランデ市とその近郊における日系人コミュニティの実態調査

2007年のバストス移住地での調査を踏まえ、2008年8～9月にカンポグランデ市で同様のアンケート調査を実施した。バストス移住地に比べて移民の歴史が古いカンポグランデ市では、日本語の継承や日本文化への関心などの点で、ブラジル社会への同化や歩み寄りがより一層進展している実態が確認された。

(3) 移民関係資料の保存状況とネットワーク・コンピュータ環境の実態調査

2007年9月にサンパウロ市の「サンパウロ移民史料館」において、日系移民関係資料の保存状況ならびにデジタル化の成否に直結するネットワーク・コンピュータ環境の実態調査を行った。また、研究対象地域の一つで、膨大な移民関係資料が所蔵されている「山中三郎記念バストス地域史料館」では、実際にデジタル化を進めるためのコンピュータ環境の整備を行った。その結果、次のような問題点や課題などが浮き彫りとなった。

- 1) 地方都市でのデジタル化作業は、貧弱なコンピュータ環境やネットワークを前提として、作業工程やその公表方法を検討する必要がある。
- 2) デジタルアーカイブは、日伯双方からアクセスしやすい形で提供すべきである。
- 3) 資金面などを考慮すると、アーカイブとしての継続性を維持するために、なるべく運営費用が安い形でのシステム構築を検討すべきである。
- 4) メタデータの収集・登録が進んでおらず、資料整理と並行してデジタル化を行う必要があるため、既存の目録情報に基づいたメタデータ登録は不可能である。メタデータの収集と登録をアーカイブ化と並行して行えるようなシステムの構築が必要である。

そこで、これらの問題に対処できるようなデジタルアーカイブシステムのあり方について技術的検討を行った。当初は、Web公開用のサーバのうち、データ収納部分などもすべてプロジェクト専用の機材を準備して提供することを想定していた。しかし、上記の問題点などを踏まえて、インターネット上で比較的安価に利用できるストレージサービスなどと組み合わせた形のシステム構成を実現する方法を検討した。またメタデータの登録に関しては、デジタル化した資料の公開自体をまずは先行させ、その後公開された資料に対して事後的にもメタデータを収集・登録・追加できるシステムの構成を目指した。

(4) 「山中三郎記念バストス地域史料館」の移民関係資料のデジタル化とメタデータ登録

「山中三郎記念バストス地域史料館」において、その代表的な史料をデジタル化し、あわせてメタデータ登録を行った。日本に持ち帰って実施した作業も含めて、デジタル化が完了したものは以下の通りである。

- ・大型地図パネル7点 → 使用機材：Canon EOS-1Ds Mark II（有効画素数1670万画素）
- ・ガラス乾板写真7点+外箱 → 使用機材：EPSON GT-X750
- ・水野龍の『笠戸丸航海日記』31ページ分 → 使用機材：EPSON GT-X750
- ・『バストス10年史』 → 使用機材：Phase One H25（有効画素数2200万画素）

以上、当史料館では合計1,308点の写真画像をデジタル化した。

(5) 「サンパウロ移民史料館」の移民関係資料のデジタル化とメタデータ登録

ブラジルを代表する日系移民史料館である「サンパウロ移民史料館」において、現地スタッフに対するデジタル化講習も兼ねて講義と作業を実施し、貴重な所蔵写真をデジタル化してメタデータ登録も行った。デジタル化が完了したものは以下の通りである。

- ・写真集『目でみるブラジル日本移民の百年』に掲載されている写真43点
(裏面の手書きの書き込みも含めて計70カット)
 - ・『ブラジル情景写真帖』(渡航から独立農になるまでの経緯) 84点
 - ・『植民地風景バストス』27点(裏面の手書きの書き込みも含めて計28カット)
 - ・『ファゼンタバストス写真帖』39点(裏面の手書きの書き込みも含めて計50カット)
 - ・その他ガラス乾板や戦前の写真33点(裏面の手書きの書き込みも含めて計41カット)
- 以上、当史料館では合計226点の写真画像をデジタル化した。

(6) カンポグランデ市の移民関係資料のデジタル化とメタデータ登録

カンポグランデ市で編纂された日本移民史『あゆみ』の作成時に収集された写真75点、ならびに移民家族を直接訪問して収集した写真77点の合計152点のデジタル化とメタデータ登録を行った。また、事例家族が所蔵するパスポートなどの史料(32カット分)もデジタル化した。

(7) サンパウロ州アリアンサ移住地と弓場農場に所蔵されている移民写真のデジタル化とメタデータ登録

2008年7～8月にかけて、サンパウロ州アリアンサ移住地と弓場農場において、「北原・輪湖記念館」管理責任者の矢崎正勝氏が収集・保存してきた日本移民に関する大量のガラス乾板写真、ならびにプリント写真の整理とデジタル化、メタデータ登録の作業を実施した。その結果、ガラス乾板写真613枚、プリント写真119枚、合計732枚におよぶ写真のデジタル化とメタデータ登録が完了した。

アリアンサ移住地やその中にある弓場農場は、ブラジルを代表する日系移住地であり、これまでも多数の調査研究が実施されてきた。今回、当地の貴重な移民写真が大量にデジタル化されたことは、移民史料の永続的な保存のみならず、移民研究の深化にも大きく貢献するものと考えられる。

(8) 高知県禰原町「竹下写真館」所蔵の移民写真のデジタル化とメタデータ登録

2009年3月6日～13日にかけて、高知県高岡郡禰原町の「竹下写真館」において、戦前のブラジル移民を撮影した写真のデジタル化を実施した。この写真資料は、1930年に家族とサンパウロへ移住し、現地で写真館を経営する傍ら各地で移民写真を撮り貯め、1941年に日本に帰国した竹下増次郎が残したもので、『在伯同胞活動実況大写真帖』としてつとに有名である。評価も高く、NHKのテレビ映像や移民写真集などにも頻用される第一級の写真帳である。

しかし、これまでは1938年発行の古い写真帳から直接撮影またはスキャンして利用されてきたため、一級品にふさわしい高品質での資料保存や画質維持に十分に耐え得ないものであった。ところが、最近になってその写真帳を作る際に使われた原版の写真や未公開のガラス乾板写真などが大量に竹下家から発見された。残念ながら保存状態は良好ではないため、早急に原版のデジタル化と整理保存が必要と判断された。

そこで、「竹下写真館」と直接交渉を行い、立教大学SFRプロジェクト研究の一環としてその

デジタル化を実施することで合意し、双方が契約書を取り交わして現地で作業を行った。その結果、約700カットに及ぶ写真のデジタル化とメタデータ登録を完了することができた。これらは2年間におよぶプロジェクト研究で収集、デジタル化、保存した多数の写真の中でも、とりわけ学術的に史料価値の高い移民資料といえる。

(9) デジタルメディアコンテンツを利用したデジタルアーカイブの制作

移民写真のデジタル化だけでなく、そのコンテンツを利用したデジタルアーカイブの制作にも挑戦した。プロジェクト期間中に制作したデジタルアーカイブは、次の3作品である。

- 1) カンボグランデ市でデジタル化した写真や現地調査で撮り貯めたビデオ映像を利用して、なぜここに沖縄県移民とその子孫が大半を占める日系社会が形成されたのかを、初期移民のファミリーヒストリーを交差させながら検証する、「映像を利用したカンボグランデ日系社会発展史－デジタルアーカイブの試み－」を制作し、2008年10月の国際会議で上映した。
- 2) アリアンサ移住地でデジタル化した写真を利用して、日本人がいかに原生林の開拓に取り組んだか、その詳細な作業プロセスを写真と文字で解説する、「移民写真資料のデジタルアーカイブ利用の実際－サンパウロ州奥地の山焼きの事例－」を制作し、2008年10月の国際会議で上映した。
- 3) 2年間のSFRプロジェクト研究でデジタル化した貴重な移民写真を、広く社会に公開できる利便性の高いWeb上のシステム構築を目指した。具体的には、各移民写真(画像)に付したデータベースから特定の条件に一致した画像を瞬時に検索し、該当する画像のブラウジングを年表と地図の双方で行えるインターフェイスを開発した。このデジタルアーカイブ (jp2br.net) は、現在Web上に公開されている (ただし、画像のブラウジング機能は現在故障中)。

なお、当初公開を予定していた写真類の多くが、著作権者から公開の承諾を得られないため未公開のままとなっている。一日も早くこれらの課題を解決し、多くの移民関係資料を一般公開できるように努めたい。

(10) 国際会議での研究成果の公表と、社会的貢献に向けた学外機関との協調

立教大学SFR国際会議助成金を受けて、2008年10月25日～26日に立教大学池袋キャンパスにおいて国際会議「ブラジル日本人移民100年の軌跡 (Centurial Trajectory of Japanese Immigrants in Brazil)」を開催した。国際会議では、ブラジルから招聘した4名の移民研究者と国内の移民研究者らが積極的に意見を交換し、これまでのブラジル移民研究の空白や断絶、今後の研究深化のあり方などについて議論を行った。

会場には研究者はもとより、学生や社会人、日系人など、幅広い層から多数の参加者が集まった。また2009年1月には、今回収集された貴重な移民資料の永続的保存やその利用に関して国立国会図書館と協議を行った。

参考資料 立教 SFR プロジェクト研究によりデジタル化された移民関係資料

資料所有者	資料種	冊数、画像点数
山中三郎記念バストス地域史料館	大型地図パネル	7 点
山中三郎記念バストス地域史料館	水野龍「笠戸丸航海日記」	1 冊 31 頁 画像 31 点
山中三郎記念バストス地域史料館	ガラス写真	7 点
山中三郎記念バストス地域史料館	「バストス移住地 10 年史」	1 冊 234 頁 画像 878 点
カンポグランデ個人蔵	紙焼き写真	152 点
カンポグランデ個人蔵	「カンポグランデ日系 コロニアの歩み」	1 冊 115 頁 画像 115 点
カンポグランデ個人蔵	パスポート等書類	32 点
ブラジル日本移民史料館	紙焼き写真	143 点
ブラジル日本移民史料館	写真帳（写真アルバム）	2 冊計 123 頁 画像 304 点
ブラジル日本移民史料館	ガラス写真	6 点
弓場農場、北原・輪湖記念資料館	紙焼き写真	119 枚
弓場農場、北原・輪湖記念資料館	ガラス写真	613 枚
高知県梶原町、竹下写真館	ガラス写真	75 点
高知県梶原町、竹下写真館	写真帳（写真アルバム）	1 冊 106 頁 画像 511 点
高知県梶原町、竹下写真館	「在伯同胞活動実況大写真帖」	1 冊 194 頁 画像 194 点
		画像合計 3,187 点

（出典：丸山浩明編著『ブラジル日本移民－百年の軌跡－』明石書店）

5. 総括

移民百周年を迎えたブラジルの日系人コミュニティでは、移民の歴史や出自への関心が高まる一方で、日系人としてのアイデンティティの希薄化や日系コミュニティの縮小・脆弱化といった問題が懸念されている。こうした中で、ラテンアメリカ研究所が主導し、現地の研究者や日系人と協同で進められた本プロジェクト研究は、日系人コミュニティのあり方やそのアイデンティティを問い直し、将来に向けてその結束力を高める重要な役割を担うとともに、当研究所が日本とブラジルの相互理解の促進や学術交流のための一つの拠点になりうることを内外に示した。

また、ブラジル各地の日系人コミュニティで急速に消失、散逸、破損しつつある移民関係資料（たとえば旅券、写真、手紙、生活用具、人々の記憶とそれについての言説）を収集・整理し、

それらをデジタル化して保存することは、両国にとってかけがえのない文化遺産を半永久的に守り、両国の教育・研究に大きく寄与することを、具体的な事例をもって示した。ラテンアメリカ研究所は、このような社会的貢献性の高いプロジェクト研究の実施により、日系人・日系社会研究の推進に寄与する道筋をつけることができた。

(文責：丸山 浩明)

参考：当プロジェクト研究に関する新聞紹介記事

1) ニッケイ新聞 (現地日本語紙)

<http://www.nikkeishimbun.com.br/070727-61colonia.html>

<http://www.nikkeishimbun.com.br/070912-61colonia.html>

<http://www.nikkeishimbun.com.br/070921-62colonia.html>

2) サンパウロ新聞 (現地日本語紙)

http://www.spshimbun.com.br/content.cfm?DO_N_ID=17931

http://www.spshimbun.com.br/content.cfm?DO_N_ID=18860

http://www.spshimbun.com.br/content.cfm?DA_N_ID=10&DO_N_ID=18726

3) ニッポ・ブラジル (現地日本語紙)

http://www.mundonikkei.com.br/nikkei/nikkei_141.php

4) A Hora (現地ポルトガル語紙) Web上の掲載はなし。

5) JORNAL NIPPO-BRASIL (現地ポルトガル語紙) Web上の掲載はなし。

6) 高知新聞 (2009年3月14日) 「ブラジル移民写真 後世に 立教大学がデジタル化」